

ロレンス・スターン覚え書(二)

佐久間 信

前節で Sterne の humour が、常識では結び付きそうもないものを智的な操作によって結合するところから生じると言いましたが、この、智的な操作、という言葉は、彼の 'sentiment' の性質を理解する上での一つの重要な鍵となります。

「イギリスの作家のうちで Sterne の名前ほど、^{註1} sentimentalism と密接に結びつけられて考えられるものはない」ことや、sentimental という語そのものも、「Sterne の造語ではないにしても、彼によって広く用いられるに至った」^{註2}ことは周知の事実ですが、Sterne の sentimentalism の本体は、というと、まだ十分に解明されてはいません。

われわれが Sterne に関する評論をあれこれ読み進んで行くにつれ、「Sterne が sentimental であるという考そのものも、疑問の余地を残す幾つかの形に分かれ、われわれを困惑さ」せ「彼の sentiment が、単なる芸術上の技巧なのか、諷刺^{註3}ととるべきか、それとも所構わずふりまかれる駄洒落なのか」との疑問が生じて来ます。

A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick はもちろんのこと、The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman の中にも「感傷の為の感傷」^{註4}と表面的には見える場面が少なくありません。感傷のための感傷とは、一旦、何ものかによって自分の心に波紋が生ずるや否や、その感傷を生じさせた当の対象には目を閉ざして、ひたすら自分の心の動きを追い求め、それに感溺する、といった意味です。

極めて 'sentimental' な話としてよく引用される Le Fever の話が、果して、この、感傷のたの感傷、感傷えの感溺と言い得るものか、暫く考えてみます。

一人息子を連れて自分の聯隊に復歸する途中、病の床に倒れた Le Fever の容態をたづねに行くよう Toby から命じられた Trim が帰って報告する情景を Sterne は次のように記します。

—In a fortnight or three weeks, added my uncle Toby, smiling,

註1. E. E. Kellett : Fashion in Literature—a study of changing taste, p. 288.

註2. Herbert Read : Sterne (Collected Essays in Literary Criticism), p. 256.

註3. Ernest Nevin Dilworth : The Unsentimental Journey of Laurence Sterne, p. ix.

註4. R. C. Churchill : English Literature of the Eighteenth Century, p. 206.

—he might march.—He will never march; an' please your honour, in this world, said the corporal : —He will march; said my uncle Toby, rising up from the side of the bed, with one shoe off : —An' please your honour, said the corporal, he will never march but to his grave : —He shall march, cried my uncle Toby, marching the foot which had a shoe on, though without advancing an inch, —he shall march to his regiment.

—He cannot stand it, said the corporal; —He shall be supported, said my uncle Toby; —He'll drop at last, said the corporal, and what will become of his boy? —He shall not drop, said my uncle Toby, firmly. —A-well-o' day, —do what we can for him, said Trim, maintaining his point, —the poor soul will die : —He shall not die, by G—, cried my uncle Toby.

—The Accusing Spirit, which flew up to heaven's chancery with the oath, blushed as he gave it in; —and the Recording Angel, as he wrote it down, dropped a tear upon the word, and blotted it out for over.

註5

(「二十日かそこいらすれば彼は行進出来るのさ」と叔父 Toby は微笑を浮かべて言葉を続けた。「お言葉をお返し致すようで申しわけございませんが、あの方は此の世ではとても行進はお出来にはなりません」と伍長は言った。「行進するとも」叔父 Toby は片方の靴を脱ぎ棄てベッドの端から身を起こして言った。「旦那様、あのお方は墓場へしか行進はお出来にはなりませんので」と伍長。「行進させるのだ」叔父 Toby は1インチも前進しなかったが、靴をはいている方の脚を踏み出して叫んだ——「彼の聯隊へと行進させるのだ」「あのお方はそれにはお耐えになりますまい」「肩を貸してあげればよろしい」と叔父 Toby は言った。「結局はお倒れになってしまいます。そんなことになれば、あの方の坊っちゃんはどうなることでございましょう」「倒れないようにするのだ」と叔父 Toby は断乎として言った。「さて、そうはおっしゃいまして、おかわいそうにあの方はお亡くなり遊ばすばかりはないので」と Trim は自説をまげなかった。「神かけて、彼を死なせたりしてたまるものか」と叔父 Toby は叫んだ。

—弾劾天使はその誓言を抱いて天の法廷へと舞い上ったが、その誓言を提示するとき顔を赤らめた——方記録天使はその誓言を書き記しながら、その誓言の言葉の上に一滴涙を注ぎ、その文字を永遠に抹消したのである。

註5. Tristram Shandy, Book VI, Chapter VIII (The Works of Sterne, vol. II, pp. 17—18. Macmillan's Library of English Classics).

「死なせてたまるものか」と、恐らく涙をたゝえながら自分の心に言い聞かす Toby は、純な美しい心の持主として描き出されていますが、作者自身は、この Toby の心情に同化し、純な心を Toby の内側から書き上げているわけではありません。感傷への感溺と、Sterne は、まさに対蹠的な地点に立っているのです。登場人物と読者との間には常に作者——物語りの語り手の Tristram——が介在し、読者の前にはからくり人形のからくりを提示しているのです。

——弾劾天使はその誓言を抱いて天の法廷へと舞い上がったが、その誓言を提示するとき顔を赤らめた——一方記録天使はその誓言を書き記しながらその言葉の上には一滴の涙を注ぎその文字を永遠に抹消したのである——こゝに人形遣いが姿を見せています。

Le Fever なる軍人が一人息子を残して死ぬ、という設定は、この軍人が Toby の前に偶然姿をみせ、それ以前には Shandy 一家の世界とは没交渉である以上、単なる設定の為の設定であり、Toby と Le Fever との間には、なんら人間と人間の接触から生ずる発展の契機は存在しません。先程の引用に現われる sentiment は、Le Fever と Toby とが互に内部に喰いこんで、そのため必然的に生じたものではありません。Le Fever は Tristram Shandy の世界の夜空に消える流星でしかないのです。Toby の気質を物語るに有名な、食事中うるさく飛び廻る蠅を、どうしてお前を殺せよう、出ておいき、世界はお前と私を容れるに十分過ぎるほど広いのだ、と言って窓から放してやったという挿話中の蠅も同じ役割、即ち作りものゝ sentiment を喚び起こす小道具としての役割を果しているのです。Le Fever にしても蠅にしても、作者が Toby を好むまゝに動かすために勝手にもち出した、Tristram Shandy の世界とは本来何も関係のない呪物です。

人形遣いの作者は常に小説の世界の前面にたちはだかり呪物を取り出し、それに対する人形の反応を読者の御覧に供する仕組みです。

Le Fever の死の場面は次のように書かれます。

You shall go home directly, Le Fever, said my uncle Toby, to my house,—and we'll send for a doctor to see what's the matter,—and we'll have an apothecary, —and the corporal shall be your nurse; —and I'll be your servant, Le Fever.

There was a frankness in my uncle Toby, —not the effect of familiarity, —but the cause of it, —which let you at once into his soul, and shewed you the goodness of his nature; to this, there was something in his looks, and voice, and manner, superadded, which eternally beckoned to the unfortunate to come and take shelter under him, so that before my uncle Toby had half finished the kind offers he was making to the father, had the son insensibly pressed

up close to his knees, and had taken hold of the breast of his coat, and was pulling it towards him.

The blood and spirits of Le Fever, which were waxing cold and slow within him, and were retreating to their last citadel, the heart —rallied back, —the film forsook his eyes for a moment, —he looked up wishfully in my uncle Toby's face, —then cast a look upon his boy, —and that ligament, fine as it was, —was never broken.—

Nature instantly ebbed again, —the film returned to its place, —the pulse fluttered — stopped — went on — throbbed — stopped again — moved — stopped — shall I go on? — No. ^{註6}

（「Le Fever 君、直ぐうちにお出でなさい」と叔父 Toby は言った。「医者呼んでどこが悪いか診て貰いましょう——薬剤師も呼んで来ます。伍長には君の看護をさせます。——そして、君の召使いには、わたしが、ならせて貰いましょう」

叔父 Toby の態度には淡白なところがあった——親密になったから淡白になるのではなく、逆に淡白だからこそ親密にもなるのだ——この淡白さが人を直ぐと彼の魂に触れ合わせ、彼の善良さを明らかにするのである。この淡白さに、彼の表情や声、態度のうちにあって常に不幸な人々を彼のもとに憩うようにとさしまねく暖さが加わっていたので、叔父 Toby が、父親〔註。Le Fever のこと〕にその親切な申し出を言い終るか終らぬうちに、その息子はしらずしらず彼の膝下ににじりより、その襟を握りしめ、しっかりと自分に押しあてたのである。

Le Fever の血液と活力は、だんだん冷たく流れも鈍くなり、その最後の城塞である心臓へと撤退の途中であったが——軍勢を盛り返した——瞬時、目のかすみも退いた——彼は希望の籠もった目差して叔父の顔をうち眺め——次に視線を自分の息子に投げた——その絆は細くかよわいものであったが——永遠に破れることはなかったのである。

活力は忽ちにして潮の退くがごとく彼の体内より失われて行った——目のかすみは再び目を覆った。——脈は、不規則に鼓動した——止った——鼓動をつづけた——激しく打った——再び止った——動いた——止った。——もっと書きましようかね？——いやもうやめた）

^{註7}
漱石が「悽楚なる」と形容した「ル・フェヴル」の話で、作者が、自分で

註6. Tristram Shandy, Book VI, Chapter X (Macmillan's Library of English Classics, vol II, p. 19.)

註7. 漱石全集第22巻 p. 157 下段 (岩波書店・昭和32年) トリスラム・シャンデー (明治30年3月5日 江湖文学)。

Toby に受け持たせた fine sentiment に酔ってなどいないことはもちろん、読者に涙を要求しているのでもないことは、上の引用から直ちに判断出来ましょう。Le Fever の脈が止ったり動いたりするところで、Toby を、Le Fever を、その息子をかき描いたのはこの私だと、物語りの作者 Sterne は滑稽な身振り宜しく舞台上に登場します。——(……再び止った——動いた——止った——もっと書きましようかね? いやもうやめた) この情景の醸し出す sentimental な空気は、こゝで、いっぺんに吹き飛ばされます。「物語りの最後にある言葉の遊戯がなかつたら」確かに「Le Fever の物語りは印象派芸術の宝石となる」^{註8}かも知れませんが、少なくとも Sterne の作り出した世界は、外ならぬ、純粹に取り出され、enthusiasm にまで高められた Toby の sentiment によって粉碎されてしまうでしょう。かゝる危険を避けるために、作者自身が登場し、balance を保つのです。「全作品の均衡と調和を産み出す」ためには、「章と章との間に均衡がとれている」^{註9}のが必要であると共に、作者が登場人物に託す情緒も、過度にわたらぬため、作者 Sterne は常に諧謔を用意して均衡を保つことに努めているのです。先程引用した Le Fever の最期の場面で、一人の人間の死を扱うときの Sterne 用語に注意してみましょう。

Le Fever の血液と活力は、だんだんと冷たく、流れも鈍くなり、その最後の城塞 (citadel) である心臓へと撤退の途中 (were retreating) であったが——軍勢を盛り返し (rallied back) ます。死なんとする人間の血液を軍勢にたとえているのは、もちろん、叔父 Toby が、彼の hobby horse である模擬戦に夢中であるのを、読者に想起させるためであります。Toby の比類のない心の暖さを描き出しながら、同時に彼の子供の積木遊びに似た模擬戦への熱中を、さりげなく二重映しにしてみせる、そこに諧謔が生まれ、平衡が保たれるのです。脈の鼓動を書き Toby の hobby horse を読者の想像のうちに浮かび上らせること、こゝに作者 Sterne が小説世界の前面に大きく立ちはだかります。この作者は同時に登場人物としての Tristram なのです。

I am now stout and foolish again as a happy man can wish to be
—and am busy playing the fool with my uncle Toby, who I have
got soused over head and ears in love.^{註10}

(頑強にして陽気なること旧に復して天下一品——小生の uncle Toby を調戯して寧日無き有様——小生 Toby にはまさに首ったけといった次第)

註8. E. A. Baker : History of the English Novel iv, 260 ff.

註9. Tristram Shandy, Book IV, Chapter XXV (Macmillan's Library of English Classics, vol 1, p. 282.)

註10. Letters of Laurence Sterne ; To Hall-Stevenson, Oct. 19, 1762. (The Shakespeare Head Edition of the Writing of Laurence Sterne p. 72. 1927.)

と Jesus College 時代からの親友 John Hall-Stevenson (Tristram Shandy 中の Eugenius)^{註11} に書き送った Sterne の手紙は、冗談めかした中にも、作者 Sterne と語り手 Tristram との合一を物語っています。作者であり登場人物である Sterne=Tristram は、The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman の表題通り、此の小説世界の中央に座を占め、情緒を、諷刺を、諧謔を、適宜料理してみせるのです。「当時の大衆好みの主題をひっさげ、Le Fever の物語りに於いて Sterne の果した仕事を考察してみよ。『どうです、こんな事は朝飯前でしょう』^{註12} と言っているようであろう」^{註13} の評言が生まれる所以です。

「如何なる印象も、かほど繊細には表現しまい」と Walter Sichel を嘆賞させた Maria の挿話に就いても同様なことが言えます。

狂気の小女 Maria が夕の祈りを笛で奏でているところに、旅の途上の Tristram が行き逢うといった設定です。

Tristram がその笛の調べに耳を傾けているのをみかけて、御者は、あれは Maria です、哀れな Maria です、と告げ、狂気の原因は、教区牧師の奸計により、彼女の結婚予告が無効なりと異議を申し立てられたことにある旨を、「私（即ち Tristram）^{註14} がその御者の顔に現在の彼の境遇以上のものを見出さざるを得ぬ」ほどつつしみ深く、わざとらしいところのない爽やかな言葉で述べます。

—God help her! poor damsel! above a hundred masses, said the postillion, have been said in the several parish churches and convents around, for her, —but without effect; we have still hopes, as she is sensible for short intervals, that the Virgin at last will restore her to herself; but her parents, who know her best, are hopeless upon that score, and think her senses are lost for ever.

As the postillion spoke this, Maria made a cadence so melancholy, so tender and querulous, that I sprung out of the chaise to help her, and found myself sitting betwixt her and her goat before I relapsed from my enthusiasm.

Maria looked wistfully for some time at me, and then at her goat —and then at me—and then at her goat again, and so on, alternately—

註11. Wilbur L. Cross : The Life and Times of Laurence Sterne, pp. 28—9.

註12. Ernest Nevin Dilworth : the 'Unsentimental' Journey of Laurence Sterne, p. 22. (1948).

註13. Walter Sichel : Sterne—a study. p. 181. (1910).

註14. Tristram Shandy, Book IX, Chapter XXIV (Macmillan's Library of English Classics, vol. II, p. 207).

—Well, Maria, said I softly—What resemblance do you find?

(神様どうかあの乙女をお救い下さい。あゝ、薄幸の乙女よ。この近くの数箇所教会、修道院では、百回と下らぬミサが彼女のために捧げられました——しかし、その甲斐もなかったのです。短い間ですけど、あの娘が正気に返ることもありますので、わたしどもは、マリヤ様がやがては彼女を正気に返して下さるものと、まだ希望をつないで居ります。然し娘のことをいちばん良く知っている彼女の両親は、このことに関しては望みを失い、娘の理性は永遠に失われたものとすっかり諦らめて居ります。

御者がこのように語ったとき、Maria は哀切にして痛恨の情の余りにも深く籠もった調べを奏でたので、私は援けようと馬車から飛び下り、同情の念で湧き返った胸の鎮まってみると、無我夢中のうちに彼女と彼女の連れた山羊の間に坐っていたという次第。

Maria はしばらくの間、物悲しそうな目差しで私を見詰め、次いで彼女の山羊を——それから私を——それから再び彼女を——等々と交互に見詰めた。

——ねえ Maria、と私はやさしく言った——どこか似ている所がありますかな?)

もちろん Sterne は、goat のもつ licentious man の意味をきかせて、Maria の物語りの「おち」を作っているのです。憐憫の情に駆られた Tristram も、純粹な (=狂気の) 少女 Maria の目からすれば、ただの好色漢に過ぎぬし、その好色漢にみだてられた Tristram は他ならぬ作者その人であるところに、「おち」の見事さがあります。Maria が最初に紹介されるところで、既に sheep ならぬ goat を彼女が連れていたことが語られているのは、Sterne の意図が、狂気の少女を取巻く sentimental atmosphere を書き出すことではなく、寧ろ、憐憫の情の厚い Tristram と好色漢との同一化のもたらす諧謔にあることをはっきりと示しています。Sterne の sentiment を「感傷のための感傷」と考えることは到底不可能なことです。sentimental な Le Fever の話をかこむ雰囲気は、作者が舞台に顔を出して、死なんとする男の脈の動きを「叙述」することによって諧謔と化し、慈悲深い Toby は、子供だましの遊戯に耽らなくてはなりません。